

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：22604

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26885022

研究課題名(和文)ゼミナールの授業外での活動における学びの研究 - 構成・経験・成果に着目して -

研究課題名(英文) Research of Learning Outside of Undergraduate Seminars: Focus on Design, Experience, and Outcome

研究代表者

伏木田 稚子 (FUSHIKIDA, WAKAKO)

首都大学東京・大学教育センター・助教

研究者番号：40737128

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ゼミナールの授業外での活動(サブゼミ、インターゼミ、ゼミナール大会、ゼミコンパ、ゼミ合宿等)について実態を明らかにし、汎用的技能を中心とする学習成果との関係を検討した。ゼミナールに関するホームページを中心とした資料調査、学生に対するインタビュー調査、教員に対する質問紙調査を実施することで、活動の構成とそこでの経験に関する知見の導出を試みた。その結果、授業外活動は学生主導の取り組みとして成立しているものの、授業の延長線上に位置づけられている場合が多く、知識や技能の補完、専門分野における興味・関心の醸成、メンバーとの協同や葛藤を通じた飛躍といった役割を担っていることが示された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to investigate seminar activities that occur outside of class, and then consider their effects on learning outcomes, including skills, perspectives and confidences. I conducted three types of studies: (1) resource studies, (2) semi-structured interviews for students, (3) a questionnaire survey for faculties. The result showed that students have the following perceptions about their learning outcomes: (a) acquiring basic and transferable skills, (b) building curiosity in academic discipline, (c) learning practical approach in specific fields, (d) creating social connections, and (e) developing confidences of overcoming difficulties.

研究分野：学習環境、教育方法、大学教育

キーワード：ゼミナール 授業外活動 学習成果 テキストマイニング インタビュー調査 質問紙調査

1. 研究開始当初の背景

(1) ゼミナールへの期待と先行研究の不足
 大学教育におけるゼミナールの価値は近年、PBL (問題解決型学習) やアクティブ・ラーニングの視点から再認識されており (安西 2013, 杉谷・山田 2013)、問題解決や対人関係を多く含み、知識と技能を実演する機会も豊富であることから、汎用的技能の習得に効果的だとする示唆も見受けられる (吉原 2010)。ゼミナールは「未確定の知識の探究活動を含む大学教育の象徴」と評されるように (朴澤 2009)、学生が課題に対して主体的に取り組むことに力点が置かれ、教員による知識伝達や指導はそれを支える重要な要因として捉えられよう。

けれども、その在り方は教育する場の条件に応じて多様であり、密室性の高さゆえに他のゼミナールと比較される機会がないため、実証的な研究はきわめて少ないのが現状である (毛利 2006)。また、各大学や担当教員のホームページにはゼミナールの紹介が記載され、紀要論文誌や学術雑誌でも実践の報告はされているものの、いずれも個別具体的な検討に留まっている。さらに、評価の視点が担当教員に依存している場合が多く、ゼミナールに対する学生の認識を俯瞰した研究は見当たらない。そのため、ゼミナールでの教員と学生間の対話 (田崎 2001) や、能動的な活動 (Obrest et al. 2009, Tsui and Gao 2007) の価値に関する明確で体系的な議論は不足している。

(2) 着想に至った経緯

以上の問題に対して、筆者ほか (2011, 2012, 2013a, 2013b, 2014) は人文・社会系のゼミナールを大学の専門教育における授業形態のひとつとして捉え、授業中に行われるフォーマルな学習活動や教員による指導の実態を広く調査してきた。その結果、他者とかかわりながら専門知を学ぼうとする意欲や、ゼミメンバーとつながっているという意識が汎用的技能の成長に影響を与えていることが明らかになった。加えて、そうしたゼミナールの価値を高めているのは、学生の特性を把握しながら共同体としてゼミナールを運営し、メンバー間の議論や課題遂行の支援を積極的に取り入れた授業構成であることが示唆された。

言わずもがな、ゼミナールは大学教育で講義と並ぶ重要な教育方法であると同時に、研究を志向する教員と学生の共同体でもある (毛利 2006, 齋木 2004)。そこでは、教員との密な交流や新たな友人との出会いが多分にあり (谷田川 2013)、日常的なコミュニケーションから専門分野の暗黙知や考え方を吸収することができる (渡部 2013)。ゆえに、ゼミナールでの学びは、授業中のフォーマルな学習活動だけでなく、その延長線上にある授業外での取り組みにも支えられているといえよう。

ゼミナールの授業外では、サブゼミ、他大学のゼミと合同で行われるインターゼミ、学部単位で開かれるゼミナール大会、ゼミコンパ (飲み会)、ゼミ合宿などの活動が多様に展開されている。授業外での学習は、汎用的技能を中心とする多様な能力の形成に効果的である (溝上 2009, 山田・森 2010) という指摘を踏まえると、ゼミナールの授業外での取り組みもまた、専門分野における問題解決やプレゼンテーションのスキルに対して重要な役割を果たしているだろう。けれども、ゼミナールに関する先行研究では、授業内の活動に焦点化した調査 (筆者ほか 2011, 2014) や、先輩 - 後輩間で生じる協同プロセスに関する考察 (山田 2011) はあるものの、授業外に特化した実証研究は十分に行われていない。

2. 研究の目的

(1) ゼミナールでの学びを捉える視座

そこで本研究では、ゼミナールには、組織化され構造化された環境において発生し、明らかに学習としてデザインされているフォーマルラーニングと、そこから偶発的に発生したノンフォーマルラーニング (OECD 2010) の2種類が混在しているという立場をとる (図1)。Cedefop (2008) によると、ノンフォーマルラーニングとは目標や時間、支援といった観点では明確にデザインされていないが、計画的な活動に埋め込まれており、学習者からは意図的だとみなされる半構造化学習のことである。いわば「ほかの活動に伴う学習」を指す (OECD 2010) ため、ゼミナール単位での授業外活動やレクリエーションなどの多くはこれに含まれるといえよう。

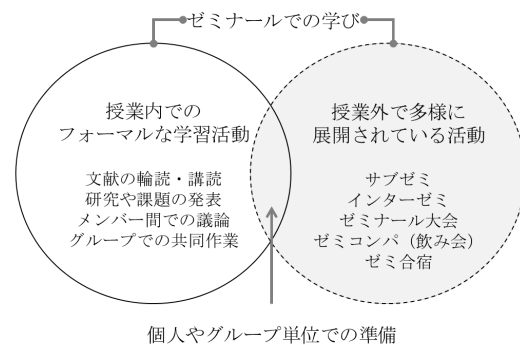


図1. ゼミナールにおける活動と学びの様相

(2) 本研究の目的と理論的枠組み

以上を踏まえて本研究では、「ゼミナールの授業外での活動」について実態を明らかにし、汎用的技能を中心とする学習成果との関係を検討した。その際、以下に示す3つの視点に基づいて調査を遂行した。

- a) 構成：活動の進め方・教員の指導のあり方
- b) 経験：活動から学生が得た経験の内容・質
- c) 成果：学生が身につけた知識・理解・能力・態度

3. 研究の方法

はじめに、ゼミナールの授業外での活動を多面的かつ詳細に把握するために、資料調査とインタビュー調査を行った。次に、ゼミナールの授業外での活動が学習成果に与える影響を検討し、多くのゼミナールに共通する一般的な知見の導出を目的として、質問紙調査を実施した。

なお、理工系の専門教育では研究室が中心に置かれ、ゼミナールはそれに付随する活動のひとつに過ぎない。つまり、独立した授業である人文・社会系のゼミナールとは性質が異なるため、本研究の対象には含めなかった。

(1) 資料調査

ゼミナールの授業外での活動は、各大学やゼミナールを運営する教員のホームページで紹介されており、具体的な事例の報告も少なくない。そこで、関連する情報を検索・収集し、テキストマイニングを用いてゼミナールの授業外での活動の特徴を明らかにした。

テキストマイニングは、テキストデータを計算機で定量的に解析し、有用な情報を抽出するためのさまざまな方法の総称である(松村・三浦 2009)。はじめに、ホームページから取得したゼミナールの授業外での活動に関するテキストを形態素に分割した。その上で、品詞を判別する技術を用いた出現頻度の集計や、語の出現パターンの構成を通じたテキストの特徴抽出を行うことで、ゼミナールの授業外での活動にどのような種類があるのかを検討した。

(2) インタビュー調査

資料調査だけでは、ゼミナールの授業外での活動に参加する学生の認識を把握することはできない。そこで、活動の構成・経験・成果の3つの視点に基づいて、インタビュー調査を行った。具体的には、以下の5項目を中心に半構造化インタビューを実施した。

- ・ 授業外での活動は、どのように進められているのか
- ・ 教員は授業外での活動に関して、どのような指導をしているのか
- ・ 学生は授業外での活動を通じて、どのような経験を得ているのか
- ・ 学生は授業外での活動を通じて得た経験を、どのように評価しているのか
- ・ 学生は授業外での活動から、どのような知識・理解・能力・態度を身につけているのか

会話内容は、調査対象者の許可を得てからICレコーダーで録音し、すべて文字起こしした上で、MAXQDA 12 (VERBI社の質的データ分析ソフトウェア)を用いて分析を行った。その際、意味のまとまりに基づく文書セグメントの切り抜きとコーディング、文書・コード・マトリックスによるケース間の比較分析、以上を踏まえたストーリーの構成、という佐藤(2008a, 2008b)の手順を参照した。

(3) 質問紙調査

インタビュー調査を通じて、ゼミナールの授業外での活動には、教員の信念や目的が影響を与えていることが示された。その一方で、授業内のフォーマルラーニングとその延長線上にあるノンフォーマルラーニングとの境界線は曖昧かつ不揃いなため、両者を切り離して論じることの難しさも示唆された。

そこで、当初の予定では教員と学生の両方に実施する予定であった質問紙調査については、ゼミナールの授業外での活動がどのようにデザインされているのかを明らかにするために、教員に対して以下の内容で郵送法による調査を行った。

調査の対象

東京都内に本部が所在する大学の中で、人文学、社会科学、総合科学系学部にも所属している教員(専任講師以上)を調査の対象とした。対象者の選定にあたっては、各学部からの抽出人数を所属教員数より比例配分した上で、ランダムサンプリング(系統抽出)を行った。都内にある81大学284学部の教員14355名の母集団に対して、すべての大学で少なくとも1名の教員が抽出されるよう配慮し、計525名に調査票一式を送付した。

調査の手順

本調査では、平成27年度の後期または前期と後期を通じての1年間に、学部2年生以上が対象の「ゼミナール」、「ゼミ」、「セミナー」、「演習」のいずれかの名称がついた授業について回答を求めた。調査の期間は、平成27年度の年度末にあたる2月下旬~3月下旬までとした。

調査の項目

質問調査票は、年齢、性別、専門分野、大学以外での職務経験、初めてゼミナールを丹津した年齢、ゼミナールの正式名称、対象学年と人数、学習テーマ、担当していたゼミナールが授業であることを確認する項目のほか、目標や活動(授業内・授業外)の設定、授業外活動の重要性に対する認識、指導の内容、自身が担当するゼミナールの魅力、ゼミナールに対する信念などから構成した。

4. 研究成果

(1) 資料調査

ゼミナールの授業外での活動について、実際にどのようなことが行われているのかを全体的に把握し、そこで生じうる学びについて仮説を立てることを試みた。具体的な事例等は、各大学のゼミナール案内やゼミナールを運営する教員のホームページに掲載されている紹介記事や記録を中心に、関連する情報の検索、収集、整理を行った。

はじめに、ゼミナールの授業外での活動に該当する5つの用語をGoogleで検索した結果、サブゼミ(37,700件)、ゼミナール大会(11,700件)、ゼミコンパ(10,100件)、インターゼミ(5,980件)、ゼミ合宿(1,550件)の順にヒットする件数が多いことが示され

た(2015年3月時点)。また、人文学系よりも社会科学系のゼミナールにおいて、授業内外での活動に関する情報が広く公開されている状況も確認された。

次に、最も情報量が多いと判断された「サブゼミ」について、内容が明確に記載された文書(30ゼミナール、137文)を検索結果の上位から順に選択し、KH Coderを用いてテキストを分析した。形態素解析を行ったところ計3,165語が抽出され、そのうち出現頻度が高かった語を列挙すると、動詞では「行う」、「学ぶ」、「深める」、「決める」、名詞では「自主」、「テーマ」、「活動」、「勉強」、「参加」という結果となった。

加えて、頻出語間の共起関係より、サブゼミでは授業内に行われる正規のゼミナールに比べて、自主的な活動や学生同士の議論が主な基盤となっており、意見の発表や研究への参加を通じて知識や理解を深めている傾向が示唆された(図2)。サブゼミは、ゼミナールの授業外活動の中でもフォーマルな活動との接続がより強いことも起因しているであろうが、学習意欲や学習に対する責任感の継続、専門的な内容理解の深化、学習方略やゼミナール固有の規範に対する習熟などの観点から、授業内での学びを補完または強化している役割が考察された。

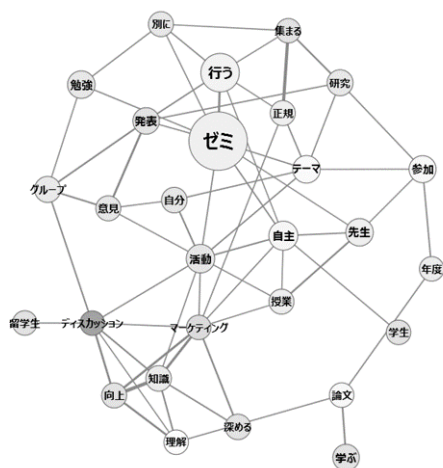


図2. サブゼミに関する語と語の共起ネットワーク

(2) インタビュー調査

ゼミナールの授業外での活動を通じて、学生がどのような経験を積み重ねているのか、学習成果としてどのような成長を実感しているのかについて明らかにしたいと考えた。ゼミナールは多くの場合、3年生から4年生の2年間にわたって所属するもので、学習内容や活動の変遷を時系列で把握するためには、卒業生が調査対象として適切であると判断した。ただし、過去の事象を回顧する際には、たとえ卒業後1~2年しか経過していなくとも記憶が曖昧であったり、詳細な事柄を思い出せなかったりすることもあると推測

されたため、出身ゼミナールが異なる卒業生に加えて数名の在學生も対象に含めた(表1)。

表1. 調査の対象

性別	年齢	区分	ゼミナールのテーマ	
A	女	24	卒業生	国際経済学
B	男	23	卒業生	社会学(文化政策論)
C	男	24	卒業生	学習科学
D	女	24	卒業生	情報科学
E	女	24	卒業生	国際経済法学
F	女	24	卒業生	社会学(アメリカ文化論)
G	女	22	卒業生	国際経済学(貿易論)
H	男	26	学部4年生	国際経済学(貿易論)
I	男	21	学部4年生	商学(世界情勢論)
J	女	21	学部4年生	情報学
K	女	20	学部3年生	社会学(文化政策論)
L	男	22	学部4年生	情報法学

調査期間は2015年6月~2015年8月で、1名あたり45~60分程度、半構造化インタビューを実施した。ゼミナールがはじまる学年や所属するゼミナールの数など、大学によって異なる事項を確認した上で、以下に示す質問項目を中心に回答を求めた。なお、複数に参加している場合は、最も印象に残っているゼミナールを選ぶよう指示した。

- ・ゼミナールでは、どのようなテーマや内容について学んでいたか
- ・ゼミナールでは、具体的にどのような活動に取り組んでいたか
- ・ゼミナールの授業時間外に、個人もしくはグループ単位でどのような活動に取り組んでいたか
- ・ゼミナールの授業時間外での活動に対して、教員はどのように関与していたか
- ・ゼミナールでの活動(とりわけ授業外での活動)を通じて、どのような経験を得ることができたか

ICレコーダーで録音した会話内容を文字起こししてから、MAXQDA 12による質的分析を行った。意味のまとまりに基づき、文書セグメントを切り抜いてコーディングした結果、ゼミナールの授業外では、(a)授業内のフォーマルな活動を下地とする活動(ディベート活動に参加するためのグループワーク、グループ研究の発表に向けた事前準備、学内の論文大会への参加)、(b)教員不在の主体的な活動(大学院生主導の文献輪読、ゼミナール単位でのイベントの企画)、(c)成果がコミュニティに還元されるノンフォーマルな活動(他大学とのインターゼミ、遊びと学習が混在するゼミ合宿、異文化交流やOB・OG会を含むゼミコンパ)の大きく3種類が多様に展開されていることが示された。

さらに、各コードについてのケース間の比較や、コード同士の関係をもとにストーリーの構成を試みたところ、(d)教員は学生からのアプローチには積極的に答えるものの、管

理はせずにつかず離れずの距離を保とうとするため、授業外での活動は自ずと学生主導にならざるを得ない、(e) 他大学や同大学の他ゼミ、他学年、留学生、企業や地域との交流が授業外活動に埋め込まれている場合が多く、現役のゼミ生も含めたつながりは継続的で強固なものになりやすい、(f) 教員から与えられる課題のハードさや指導の厳しさ、チームやグループワーク中の意見の衝突や大喧嘩、研究の遂行や発表における嫌な失敗を通じて、誰もが一度は「やめたい」と思い悩む、などのプロセスが明らかになった。さらに、そうした苦労や困難を経験する中で、専門分野の研究に対する考え方や論理的・批判的な思考力が身に付き、プレゼンテーションの姿勢やスキルが成長するだけでなく、人とかかわることへの自分なりの見方が深まっていく様子が示唆された。

(3) 質問紙調査

本研究の計画段階では、ゼミナールの授業外での活動が学習成果に与える影響を検討するために、全体の進め方や学生に対する指導のあり方は教員から、活動から得た経験の内容や質、身についた知識・理解・能力・態度は学生からデータを収集することを予定していた。けれども、「(2) インタビュー調査の成果」のところで述べた通り、ゼミナールの授業外においては、授業内のフォーマルな活動を下地とする活動や成果がコミュニティに還元されるノンフォーマルな活動など、授業内との境界線が曖昧で両者を切り分けて論じることの難しさが示唆された。

その一方で、授業外活動が学生主導になりやすいとはいえ、多様な人々との交流の機会や飛躍のきっかけとなるような課題は、教員によって意図的に提供されている場合が多く、想定していた以上に教員の信念等が色濃く反映されている可能性も示された。そこで、質問紙調査については当初の予定を変更し、ゼミナールの授業外での活動が教員によってどのようにデザインされているのか、という問いについて検討することを目的とした。

都内の大学に所属している計 525 名の教員に調査票一式を郵送した結果、全体の 30%にあたる 157 名の教員より回答が得られた。回答者の内訳は、男性 109 名 (69.4%)、女性 44 名 (28.0%)、欠損値 4 名 (2.5%)、年齢の平均値は 51.2 歳 ($S.D. = 10.3$) であった。また、初めてゼミナールを担当した年齢と回答時の年齢との差から、ゼミナールのおおよその経験年数を算出したところ、平均値は 15.5 歳 ($S.D. = 9.7$) となり、経験の豊富なベテランの教員が回答している傾向が確認された。

授業外活動の重要性に対する認識については、「そのゼミナールでは、授業時間外の活動をどの程度、重要視しましたか? あてはまる数字 1 つに をつけて、その理由を記入してください。」という質問に対して、「1. 全

く重要でない~5. とても重要である」の 5 件法とその理由に関する自由記述を求めた。その結果、「全く重要でない」が 6 名 (3.8%)、「あまり重要でない」が 14 名 (8.9%)、「どちらともいえない」が 22 名 (14.0%)、「まあ重要である」が 51 名 (32.5%)、「とても重要である」が 52 名 (33.1%) となった。理由については、「時間内では終わらない課題の量のため。」や「調査(計画・実施) 報告書の作成、発表準備は授業外で行うため。」といった時間の制約に関する記述から、「授業時間外の学習成果がゼミ時間中に発揮されるため。」、「ゼミ時間外でのグループ活動は、教室空間では気づけないお互いのこと、社会のことがたくさんあり、ものすごく成長を促すため。」等の学習成果への言及に至るまで、幅広い回答が得られた。

本調査では、ゼミナールに対する信念や授業外活動の重要性に対する認識が、目標や活動(授業内・授業外)の設定、指導の内容に与える影響を明らかにすることを目指しており、説明モデルの検討は引き続きの課題としたい。また、これまでの大学教育に関する実証的研究が講義の改善に集中していた中で、ゼミナールというコミユナルな学習環境に着目し、とりわけ等閑に付されてきた授業外活動の実態を明らかにした本研究は、試行錯誤しながらゼミナールを実践している多くの大学教員に、何らかの実践的な知見を還すことになるだろう。今後も、個々の事例をインタビュー調査によって深く検討しつつ、質問紙調査により全体像を捉えるという両方のアプローチを大切にしながら、ゼミナールの価値を広く共有可能な形で提示していきたい。

<引用文献>

- 安西祐一郎 (2013) 「主体性」を身につける - PBL の有効性と課題. 大学時報, 349: 30-37
- Cedefop (2008) Validation of non-formal and informal learning in Europe: a snapshot 2007. http://www.cedefop.europa.eu/EN/Files/4073_en.pdf (accessed 2016.03.16)
- 伏木田稚子, 北村智, 山内祐平 (2011) 学部 3, 4 年生を対象としたゼミナールにおける学習者要因・学習環境・学習成果の関係. 日本教育工学会論文誌, 35(3): 157-168
- 伏木田稚子, 北村智, 山内祐平 (2012) テキストマイニングによる学部ゼミナールの魅力・不満の検討. 日本教育工学会論文誌, 36(Suppl.): 165-168
- 伏木田稚子 (2013a) 教員がゼミナールの授業構成上で抱える困難の検討. 第 19 回大学教育研究フォーラム発表論文集, 92-93
- 伏木田稚子, 北村智, 山内祐平 (2013b) 教員による学部ゼミナールの授業構成 -

- 学生の特性把握・目標の設定・活動と指導 - 名古屋高等教育研究, 第 13 号: 143-162
- 伏木田稚子, 北村智, 山内祐平 (2014) 学部ゼミナールの授業構成が学生の汎用的技能の成長実感に与える影響. 日本教育工学会論文誌, 37(4): 419-433
- 朴澤泰男 (2009) 一橋大学の教育条件と授業の効力 - 全国大学生調査を用いた研究ノート(2). 一橋大学大学教育研究開発センター年報, 25-37
- 松村真宏, 三浦麻子 (2009) 人文・社会科学のためのテキストマイニング, 誠信書房, 東京
- 溝上慎一 (2009) 「大学生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討 - 正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す. 京都大学高等教育研究, 15, 107-118.
- 毛利猛 (2006) ゼミナールの臨床教育学のために. 香川大学教育実践総合研究, 12: 29-34
- Oberst, U., Gallifa, J., Farriols, N. & Vilaregut, A. (2009) Training emotional and social competences in higher education: the seminar methodology. Higher Education in Europe, 34(3): 523-533
- OECD (2010) Recognising non-formal and informal learning: outcomes, policies and practices. (松田岳士 (訳) (2011) 学習成果の認証と評価-働くための知識・スキル・能力の可視化. 明石書店, 東京)
- 佐藤郁哉 (2008a) 質的データ分析法 - 原理・方法・実践. 東京: 新曜社.
- 佐藤郁哉 (2008b) QDAソフトを活用する実践 質的データ分析入門. 東京: 新曜社
- 齋木喜美子 (2004) 演習の方法. 日本教育方法学会(編) 現代教育方法辞典, 東京, p.494
- 杉谷祐美子, 山田剛史 (2013) 大学での学習. ベネッセ教育総合研究所 第 2 回 大学生の学習・生活実態調査報告書. http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/2012/hon/pdf/data_14.pdf (accessed 2016.03.16)
- 田崎宣義 (2001) 一橋大学: ゼミナール 古く新しい伝統の指導法は学部を超えて機能する. カレッジマネジメント, 19(5): 18-21
- Tsui, L., & Gao, E. (2007) The efficacy of seminar courses. Journal of College Retention, 8: 149-170
- 渡部信一 (2013) 日本の「学び」と大学教育. ナカニシヤ出版, 京都
- 山田嘉徳 (2011) 先輩後輩関係を指導単位とするゼミ制度の有効性に関する一考察: B&S 制度における協同的な学びに着目して. 京都大学高等教育研究, 17: 1-14
- 山田剛史, 森朋子 (2010) 学生の視点から捉えた汎用的技能獲得における正課・正課外の役割. 日本教育工学会論文誌, 34(1), 13-21.
- 谷田川ルミ (2013) 先生と友人との関係. ベネッセ教育総合研究所, 第2回 大学生の学習・生活実態調査報告書. http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/2012/hon/pdf/data_12.pdf (accessed 2016.03.16)
- 吉原恵子 (2010) 学生の学習態度・学習経験とジェネリックスキルの評価. 平成 19 年度科学研究費補助金 基盤研究(B) 学士課程教育のアウトカム評価とジェネリックスキルの育成に関する国際比較研究報告書, 53-59
5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)
- 〔学会発表〕(計 3 件)
- Wakako Fushikida, Perceptions of Inquiry-Based Learning Community: What Do Students Learn Outside of Undergraduate Seminars. The 14th Annual Hawaii International Conference on Education, 2015.01.05, Honolulu (U.S.A.)
- 伏木田稚子、ゼミナールの授業外での活動に関する探索的研究、第 21 回大学教育研究フォーラム、2015 年 3 月 13 日、京都大学(京都府・京都市)
- Wakako Fushikida, Research of Learning Activities outside of Undergraduate Seminars. The 13th Annual Hawaii International Conference on Education, 2015.01.05 - 2015.01.08, Honolulu (U.S.A.)
- 〔図書〕(計 1 件)
- 伏木田稚子、ミネルヴァ書房、教育工学選書『教育工学研究による高等教育の改善』、2 章「ゼミナール教育」、編集中
- 〔その他〕(計 1 件)
- 伏木田稚子、ゼミナールでの共同体的な学びを解きほぐす、第 3 回 Edu-Lab Meeting「教え手のリフレクションを促す研究アプローチ」、2015 年 12 月 15 日、帝京大学(東京都・八王子市)
6. 研究組織
- (1) 研究代表者
伏木田 稚子 (FUSHKIDA, Wakako)
首都大学東京・大学教育センター・助教
研究者番号: 40737128